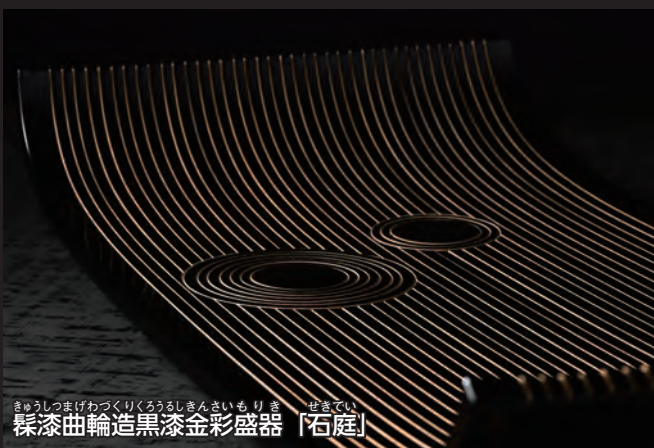
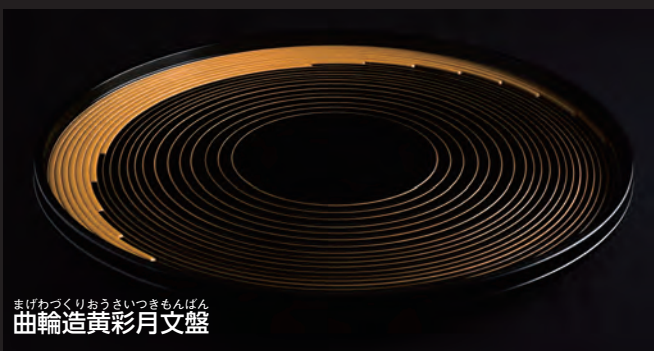




まげわづくりくろためもりき
曲輪造黒溜盛器



きゅうしつまげわづくりくろうしきんさいもりき せきでい
髹漆曲輪造黒漆金彩盛器「石庭」



まげわづくりおうさいつきもんばん
曲輪造黄彩月文盤

大西勲さんプロフィール

昭和 19 年福岡県中間市に生まれる 昭和 49 年漆芸家
で人間国宝の赤地友哉に弟子入り 昭和 55 年妻の
故郷下館市へ転居 昭和 57 年石川県輪島漆芸技術研
修所、香川県立高松漆芸技術研究所で講師を務める
平成 14 年重要無形文化財保持者に認定 平成 16 年
紫綬褒章受章

——大西先生の作品の特徴を
教えてください。
私の作品は「曲輪造」と言っ
て、径の異なる輪を組み合わ
せて器の木地を作り、その上
に何回も漆を塗るものです。
漆の精製も含めて、すべての
工程を私一人で行います。
私の父は職人で、襖の建て
付けが悪ければ家ごと持ち上
げて修理するような人でした。
私も父親に似たのか、職人氣
質なのか、人任せにすること
ができない性格でしてね。曲
輪造は非常に時間がかかるの
で、年に3、4点でできればいい



漆芸家
しつげいか

大西 勲さん

おおにし

いさお

重要無形文化財・髹漆保持者（人間国宝）
きゅうしつ

大西勲さんは、漆芸の第一人者で、重要無形文化財
保持者（いわゆる人間国宝）です。現在も市内で制作
を続け、素晴らしい作品の数々を世に送り出していま
す。9月26日（木）から、しもだて美術館で開催され
る企画展を前に、大西先生にお話を伺いました。

曲輪造ができるまで

仕立てるのに手間がかかる非常に高度な技法で、年に数点しか作ることができない逸品です。大西先生は、全工程を一人で行います。

- ① 檜の板を雨にさらして灰汁^{あく}抜きをする
- ② 10年かけて乾燥させた檜の板を鉋^{かん}で削り薄板を作る



- ③ お湯の中に薄板を入れる
- ④ 薄板を木製のコロを使い曲げていく
- ⑤ 丸く曲げられた薄板を竹ばさみで固定し曲輪を作る
- ⑥ 竿に通して乾燥させる
- ⑦ 径が異なる曲輪を組み上げる



- ⑧ 完成した木地に漆を何重にも塗る



豊かな場所だからこそ、 伝統工芸は育まれる。

ほうです。
—— どういったことから、曲輪造の道を歩もうと思ったのですか。
神奈川県の自動車工場で働いていたところ、鎌倉彫を習い始めましてね。4年間の修行を終えたとき、曲輪造の第一人者で人間国宝の赤地友哉先生の講演を聞きに行ったんです。講演の帰り道、財布をなくしてしまっただんですが、後日、赤地先生本人から「君、財布をなくさなかったか」と

連絡があったんです。名刺を手がかりに、赤地先生の元に届いたようです。ちょうどその時、次は輪島でも行って漆の勉強でもしようかと思っていたので、駄目で元々「弟子にしてください」と言ったら「いいよ、明日から来なさい」と言ってくれて、弟子入りさせてもらいました。私の人生全般に言えることなのですが、人生は本当に偶然の連続です。—— ご自身も人間国宝になられてから、17年の月日が経ち

ました。今ではどんな意味があると感じていますか。

私は肩書きとか役職とか、そういったものは気にしない人間なんです。とは言え、自らの技術を伝承していくのも、人間国宝の務め。回数は減りましたが、現在でも年に4回、石川県の輪島へ指導に行きます。

私の仕事は、道具を作ってくれる人や材料を何百年も何代もとっておいてくれる人がいて成り立っています。そういった人々のおかげで、今もこうして仕事をさせてもらっています。

—— 先生の作品は黒や赤を基調としたものが多いですが、こだわりがあるのでしょうか。

私が生まれ育ったのは九州の炭鉱のまちでした。当時、石炭が「黒いダイヤモンド」と呼ばれていた時代です。黒は石炭の色で、赤は石炭の燃える色。幼いときの記憶というものが、今の作品作りにも反映されているのかもしれない。

それと、本来作品は食べ物の器。そこに盛った食べ物がおいしそうに見える、それでいいんです。「素朴で粋なもの」。これが、自分の行き着いた答えなのかと。

—— 大西先生は市外から越ざれてきましたが、今の筑西のまちは、先生の目にどのような映りますか。

ここは穏やかで、大きな災

害もなく、暮らしやすい場所。私は、豊かな場所でなければ、伝統工芸は育まれないと思っています。ずっと住んでいる人には気付かない魅力もあるかもしれません。

—— 9月26日（木）から、しもだて美術館で「筑西の至宝 美の巨匠展」が開催されます。どのような視点で楽しめばよいのでしょうか。

これは何に見えるか。この中から1点もろうことができないならどれがいいかということ意識して見てみるのはいかがでしょう。まあ、あまり難しいことは考えずに、感じるままに「漆塗り」というものを見てもらえればいいと思います。